

佐々木邦全集



佐々木邦全集

第一卷



佐々木邦全集1

いたずら小僧日記
珍太郎日記 親鳥子鳥

昭和四十九年十月十日 第一刷

昭和四十九年十二月十日 第二刷

著者 佐々木邦

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二

電話東京(〇三)九四五―一―二一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©佐々木孝雄 一九七四年

目次

いたずら小僧日記

5

珍太郎日記

91

親鳥子鳥

297

解説・尾崎秀樹

383

いたずら小僧日記

乃公は昨日で満十一になった。誕生日のお祝に何を上げようかとお母さんが言うから、乃公は日記帳が欲しいと答えた。するとお母さんは早速上等のを一冊買って呉れた。姉さん達は三人共日記をつけているから、乃公だってつけないや幅が利かない。

物は最初が大切だそう。初めて逢った時可厭だと思つた人は何時までも可厭だとは、お花姉さんの始終言う事だ。それで乃公も此最初を巧くやる積りで、色々と考えて見たが、どうも面白い事が書けない。すべて物には始めがある。正月は明けまして始まり、演説は満堂の紳士淑女諸君で始まり、手紙は拝啓陳者で始まる。しかし日記は何で始まるものか、始がらして分らないのだから、全然見当がつかない。弱っちまう。

お花姉さんには什麼事が書いてあるか知ら、一つお手本を拝見してやろうと好い所に気がついて、乃公は切と姉さんの室へ上つて行つた。平常机の引出に入れとくのは承知しているが、鍵がかつてあるので、合う奴を探すのに大骨を折つた。

實際鍵をかけて置く筈だ。乃公の悪口が大部分書いてある。第一太郎太郎と呼捨てに書いてくのが気に食わない。「太郎のオシャベリが皆喋つて了つた」等は頗る敵しい。どっちがお喋りだ。兎に角処分は追つて後の事として、帰

つて来ない中にと、乃公は一生懸命で丁寧に一頁写し取つた。

日が暮れると間もなく、富田さんがやつて来た。富田さんは毎晩のように遊びに来る。肥り返つて岩畳骨格の男だ。顔は頗る不器用で御丁寧な鰻と来ているが、お金は大層あるそう。お島のいう所に依ると大分お花姉さんに参つてゐるそうだが、トラランプで参つたかピンポンで参つたか、其辺までは詳しく訊いて見なかった。

乃公が例の日記帳を抱えて、得意然と客間へ入つて行くと、富田さんは例の赤ら顔をテカテカさせて、

「やあ、太郎さん、どうだね」

と言つて、キャンデーを呉れた。乃公は此人は那麼に嫌いでもない。君の持っているのは其は何かねと訊くから、是は日記帳です、未だ買いたての貰いたての写したてのホヤホヤですと答えた。すると尚お拝見致したそうにしているから、お目にかけてやつた。

「ふーむ、是や豪気だ。金縁だね」

と富田さんは仔細らしく乃公の日記帳を見ている。姉さんのお氣に入らうと思つて、乃公にまで怎麼に御愛嬌を振撒くのだらうが、豪氣だの豪勢だのという下町言葉を使つては、氣位ばかり妙に高いお花姉さんに好かれる筈がない。それでも富田さんが、

「花子さん、これから私が太郎さんの日記を朗読致しますから、歌子さんも御謹聴なさい」

といつて椅子を離れた時には、お花姉さんもお歌姉さんも、何卒といつたように頷いた。乃公も面白からうと思つて、別段故障を申立てなかつたが、今考えて見ると彼の時

故障を申立てると宜かった。トウトウ大変な事になって了った。富田さんは委細頓着なく、エヘンと氣取った咳払いをして、早速読みにかかった。

「富田さんなんか最早来なければ宜い。日曜の晩にも来て真正に煩さかった。私如何しても彼の人は嫌い。お金があるつてお母さんは仰有るけれど財産ばかりが人間の全体じゃない。誰が好き好んで若い身空を邪魔ところへ嫁くものですか。お母さんだつて若い時の記憶もありましように、真正に少しは私の身になって考えて呉れても宜さそうなものだ。邪魔鬼のような手をして不恰好なつてありやしない。家作が何軒あるの地所を何程持つてゐるのつて外、何一つ餘な口も利けない芸無しの癖に。年甲斐もなくまあ彼の赤いネクタイは何でしよう。本当に生好かない氣障な人だ。第一趣味が低いわ。低い所じゃない全然零だわ。此間も帰りがけに私を捉えて失礼な接吻をしようとしたり……那麼奴に接吻される位なら、私は伊勢鰯に接吻して貰う方がいい。同じ人間で斯うも違うものか知ら。ああ清水さん！清水さんは憤つていなさるのか知ら。此間も妙に何か嫌味をお言いだつたが、どうして世の中は恙うしたものだろう。男らしい男が貧乏で、富田さんなんか金持なんだから、真正に人を馬鹿にしている。若し清水さんが富田さんで、富田さんが清水さんだったら……おや然うじゃない。清水さんが富田さんで、富田さんが清水さん——じゃ矢つ張り都合が悪い。ああ何だか分らなくなつちまつた」

お花さんは日記帳を取返そうとして頼りに焦燥したが、富田さんは矮小だけれどお花さんよりは丈が高い。それに其度に渡すまいと丈仲をして手を高く掲げるから仕方がな

い。トウトウ読んで了った。そして果せる哉、本統に伊勢鰯のように真赤な顔になった。乃公は困つたと思うと、富田さんが突然乃公の手を捉えたのには喫驚した。

「太郎さん、是は君の悪戯だらうね」

「いいえ、僕じゃないですよ。お花姉さんの日記を僕が写したんですよ」

と乃公は嘘を吐いちゃ悪いと思つて、事実ありのままを答えた。これで富田さんがワシントンのお父さん位物の道理の分つた人だと、早速乃公を抱き上げて、私は大馬鹿三太郎と書かれても一つの嘘を言わぬ我が親愛なる太郎さんを持つ事を好むとか何とかと直訳的の事を言つて、大に喜ぶのだからに、不幸にして先方が其人でなく、当方もワシントンでないのであつて見ると、今更何とも苦情の言ひようがない。乃公も嘘を吐けばよかつた。富田さんは見る間に顔色を変えて、何か言いたそうに口をモグモグさせたが、グーイと喉を鳴らしただけで一言もなく、さつさと出て行つて了つた。戸が毀れやしないかと思われる位大きな音がした。乃公は何だか氣の毒でならなかつた。

富田さんが門あたり迄行つた頃、「太郎さん 本當にお前は！」とお花姉さんは突然乃公の首筋に獅嘯付いた。乃公は實際先刻から既に恐縮していた矢先だから、心臓が脳天へ登つたような心持がした。そして斯う事が面倒になつては又什麼目に遇わされるかも知れないと思つて、手早く振切つて、一目散に自分の室に逃込んだ。

今日は家の者は皆御機嫌が悪い。乃公の顔を見ると白い

眼をする。お島の談話によると、乃公のお蔭で大略出来かけていた下話が全然毀れて了ったのだそうだ。言葉を換えて言えば、乃公の爲めにお花姉さんは富田さんの許へお嫁に行けなくなつたのだそうだ。果して然らば真に願つたり叶つたりじゃないか。姉さんは頓首再拜して乃公にお礼を言つて然る可き筈だ。然るに是は又何たる矛盾な仕打だらう。無暗矢鱈とツンツンして、今にも食い付きそうに乃公を睨める。真正に恩を知らぬ行為というものだ。乃公は最早決して清水さんの許へなんか使に行つてやらないからいいや。

怎麼時に家にいたつて些とも面白くない。然うかといつて長男であつて見れば、家を逃出して電車の車掌になる訳にも行かないから、乃公は釣竿を担いで川へ出掛けたけれども、今考えて見ると實際釣魚になんか行かない方が宜かつた。乃公は何時でも後で後悔する。尤も牧師さんも人間は後悔するようでなくてはいいけぬというから、是で善いのかも知れぬ。其は兎に角乃公は川へ落ちて尙少して死ぬ所だつた。これというの自一至十姉さん達が悪い。乃公は家に擬つとしていたかつたのだけれど、姉さん達が苛めつ子見たいに白い眼ばかりして、出て行けがしにするものだから、乃公は可厭だつたが押して出掛けたのだ。何人が物数奇に落ちたくて川へ落ちるもんか。落ちたのは如何にも乃公の過失だ。しかし其過失の原因は全く姉さん達にある。余り天氣が好いので魚は些つとも餌につかない。乃公は退屈だつたから、ワッフルを喰べ、ビスケットを食ひ、林檎まで平げて、最早好い加減にして切上げようとしていると、浮が頻りに動く。竿が絞れる程グイグイ引く。占めた

と思つて竿を揚げる拍子に、余り前へ乗出したもので、不覚川の中へ踏込んで了つた。決して落ちたくて落ちたんじゃない。

気がついた時には、乃公は藁火の傍に大勢に取巻かれていた。大方乃公が死んだと思つて火葬にする積りだつたのだらう。気の早い奴等だ。若し骨になつてから正気に返つたら奈何する積りなんだろう。真正に危い所だつた。油断も隙もなりやしない。

水車の叔父さんに背負さつて、家に着いたのは最早トボトボ頃であつた。お母さんは乃公を抱かめて涙を流した。

宛然十年も別れていたようである。姉さん達も太郎太郎つて恰も太郎の歳の市が始つたような騒動を入れる。殊にお花姉さんは身に覚えがあるから親切なもので、上等のビスケットを乃公の枕元へ持つて来てくれた。皆の御機嫌は既に全然變つてゐる。して見ると時には川に落ちるのも、大阪の伯父さんの言葉を借りていえば、川に陥るのも、満更損じゃないと思う。それは兎に角、無暗と乃公に毛布を巻付けて、写真を撮るのじゃあるまいし、擬つとしてお居で、擬つとしてお居でというのには尠ならず弱つた。熱苦しくて仕様がな。水で冷えたのだから折返して温めさえすれば直ると思つてゐるのだらう。ドクトル森川にも似合わぬ単純な思想である。

乃公は余り苦しいから、窺と室を脱出して、客間へ入つたけれども、見つかると又叱られるから、窓掛の後に匿れてゐたが、其中に大層身体が疲るくなり、次いで睡くなつた。

何だか話声がすると思つて目が覺めた時には、最早煙火

が点いていた。乃公の直ぐ前の長椅子に何人か二人腰を下している。腰を下しているばかりじゃない、何うやら凭れ合っているようだ。一人はお春姉さんに相違ない。香水の香で分る。お春姉さんのは何時もバイオレットだ。お春姉さんの御相手なら、今一人は彼のハイカラ筈に極まっている。森川さんは先刻乃公に菓を盛ってくれて、未だ愚図愚図していたと見える。二階でピアノを弾いてるのは彼はお歌姉さんだろう。いやお歌姉さんにしては少々巧過ぎる。今夜は富田さんが来ないから、お花姉さんもお二階なのだろうなどと思っていると、

「ねえ、春子さん、たった半年の事だから、あなたも機嫌よく待つて下さい、ね。秋になれば下条さんの病院で若手が一人要る。最早概略約束が出来ていますから、然うなれば患者も今よりは豊と殖えます。もう僅か半年、六箇月です。ね、待つて下さい。春子さん」

確かにドクトルの声だけれど、一体何を待つのだろう。「そりや貴下さえ其積りで確乎していて下さるなら、私は何年でもお待ち申しますわ」

とお春姉さんが答えた。そして二人は何かクスクス笑い出した。何が那麼に可笑しいのだ。此方の方が余つ程可笑しいけれど、尚お息を殺して聴いていると、

「けれどもね、春子さん、是は極く秘密にして置きましょうねえ。秘密は最良の政略です」

「無論私も其積りよ」

とお春さんが答えたか答えないに、何人か表から戸をコツコツと叩いた。すると姉さんは電氣にでも打たれたように飛立ち、森川さんも人真似子真似で、ボールのように飛

上つて、二人はテーブルを距てて端然と向合に坐つて、「お入りなさい」どうも種々な芸当をする奴等だ。

殆んど其と同時に戸が開いて、大勢ドヤドヤ入つて来た。お母さんが先立になつて、これは失礼、太郎は此処へは参りませんでしたかと訊く。森川さんは「はい、一向」と答えた。はい一向もないものだ。乃公は先刻から僅半間とは離れぬ処にいるんだぞ。今日は乃公が死にかけたので、只今見舞人が罷越したのであるが、肝腎要目の御当人の姿が見えないので、お母さんが探しに來たのである。はい一向もないものだ。で、此上御心配をかけては濟まなかつたから、乃公は窓掛けの中から躍出て、突然其処に四つん這になつて、ウーウと一つ唸つてくれた。

「ああ太郎、お前はまあ奈何おしなのだねえ」

とお母さんは然も呆れ返つた如く、ねえを引張つて、天手古を舞いかける。

「まあ太郎さん、お前は先刻から此の中にいたのかい」

とお春姉さんはお自慢の大眼玉を睨る。

「ええ、いましたよ、十六世紀頃から此処にいました。ねえ、姉さん、秘密は最良の政略ですねえ。半歳は六ヵ月でムいますねえ。ヘッヘヘヘ」

と乃公は一歩進んで赤ん眼をして呉れた。

お春さんは顔を赤くして乃公を捉えた。そして、

「さあ彼方へ行つしやい。お母さんに御心配をかけて」と万事お母さんに託けて、乃公を捲く料簡と見えた。

「行きますよ行きますよ。其様に酷い事をしなかつたて行きますよ。けれども姉さん、姉さんと森川さんは……」

女というのは理性がないから困つて了う。姉さんは矢

庭に乃公の口へ手を当がって、引摺り出して戸を閉めて了った。

乃公は再び毛布巻にされて身動きも叶わぬ。今度はお鳥が番人をしてから到底逃げる訳に行かない。可けませんよとお鳥が泣きそうになるのにも構わず、乃公は乗出して此日記をつけた。いくら乗出しても今度は川へ落ちっこない。其間にお鳥は死にかけた魚のように欠伸ばかりしている。それが追々乃公に伝染して、乃公も大分睡くなつた。

二週間というものの日記どころでなかった。川に落ちて水を飲んだ上に、汗の出花を冷えたのが悪かつたそうだ。森川さんは、日に二遍も見に来て呉れる。親切な人だ。此間赤ん眼なんかしなければよかった。しかしお春は太い女だ。今朝お花姉さんに、これからは支度が忙しいから太郎が当分寝ていて呉れればいいなんて言っていた。何の支度か知らないが、一体何処を押せば那摩音が出るのだろう。呆れたもんだ。乃公は丈夫の時には一日に三度も郵便を出しに行つてやつた。尤も途中で手紙を失くした事が三四遍あるけれど、其だつて乃公は土鼠のように黙っていたから分りっこない。其を木の端か何ぞのように、一月も寝ていればいいなんて何事だろう。

今朝は大変心持が好くて起きたい位だった。お鳥が朝御飯を運んで来た時、乃公は窃と床を脱出して、戸の後に匿

れていた。お母さんの黒い肩掛を頭から被つて、戸が開くか開かないに、乃公はお鳥の足に嚙り付いた。お鳥め乃公をボチか何かと思つて、お臍を投出して、御丁寧に悲鳴を揚げた。馬鹿な奴だ。家中の人が井戸浚でも始つたように寄つて集つて来た。茶碗も何も粉微塵になつて了つた。考えのないつて程のあつたものだ。斯うした醜相かしい女じゃないと思つた。それでもお鳥は何とも言われやしない。乃公ばかり叱られた。もう乃公は決心した。快くなり次第家を遁出して電車の車掌になる。恁麼間尺に合わない事はない。

今日からは起きても宜い事になった。しかし歩いちゃいけないんだ。乃公は毛布巻にされて腕椅子の上に坐つていたが、おびんずる様のように始末に了えない。退屈で仕方がない。臥ているよりか大儀なもののだ。喉が乾いたから湯を一杯持つて来いとお鳥を追払つて、乃公は歌さんの室へ行つた。引出の中に写真が沢山あつた。

富子さんが来ているので皆は客間にいる。お鳥は乃公を探しに来たが、乃公が戸棚の中に匿れたのを知らないから、「おや、此処にもいなさるぬ」と嘘を言つて行つて了つた。後は乃公の天下である。

写真は沢山あつた。乃公の事を悪戯だの腕白だのというが、姉さん達こそお転婆だ。写真の裏に種々の楽書がしてある。中には乃公の説めないものもあるが、「自惚か、がみ」というのは鬚をピンと跳ねさせて鼻眼鏡を掛けている。「これでも申込んだのよ」というのがある。拙い顔をして

いる。「驢馬の肖像」は耳丈け人並で全く驢馬がフロックコートを着たようだ。「何という口だろう」君は口が馬鹿に大い。「珍世界」というのは荒刻の仁王のように怖い顔だ。其他種々あったが、一々書いていた日には夜が明けて了う。兎に角乃公は大きくなつても、決して女の子に写真を作るまい。獣呼わりにされたり鉛筆を塗られたりして堪るものか。

今日は久しぶりで階下へ下りて、皆と一緒に食事をした。「太郎さん、お前は何を那麼にポケットに入れて置くの？大変膨らんでるじゃないか。宛然通の懐中のようにだよ」とお歌さんが言った、通というのは、毎日のように此界隈を歩く狂人の乞食で、茶碗の断片でも下駄の棄てたのも、何でも彼でも手当り次第に拾って懐へ入れる。其れが病氣なのだそうだ。そして「通は馬鹿だよ」と妙な調で語つて歩く。桶屋の酒飲親爺は彼の乞食は乞食でも愛嬌があると云つて褒めていた。其は兎に角乃公は動悸としたが、

「ええ、色んな大切の物が入ってるんです」歌さんは笑いながら、「私は又太郎さんが逃げる支度をしているのだと思つた。御本や着物をポケットに入れて」乃公は黙つて笑つていた。皆も笑っている。危い所だった。

昼頃隙を見て乃公は家を脱出した。そして例の写真の本尊達を一々訪問して歩いた。一番最初に行ったのは「自惚かがみ」君の家であつた。先生店に鯉構えていた。乃公は

大人になつても那麼鬚は生したくないと思つた。いくらカイザル鬚がコレラ病のように流行つたつて、彼では些つとカイザリ過ぎる。其も太いのなら兎も角だが、細いのが五六本ピンと蜻蛉返りをしているのは決して見とも好いものでない。

「や、太郎さんか、よく来たね。もう全然快いかね。うむ、其は好かつた」と搔癢真似は一人で喋っている。乃公は一寸の間話をした。

「姉さん達は如何ですか。此頃は店の方が忙しいもんで、大變御無沙汰しちまつた。歌子さんは矢張りピアノですか」

と此方で返辭もしないのに能く喋る奴だ。歌さんがピアノで堪るものか。歌さんは乃公の姉さんだ等と思つていと、先生新しい襟飾を出して来て乃公に呉れた。乃公は引きかえにポケットから写真を引張り出して渡した。姉さん達の悪戯で、鬚は鉛筆で二倍も引伸されている。

「其写真はあなたに似ていますね」

という、見る間に天氣模様が変わつて、

「太郎さん、是は君の悪戯だろう。何人が恠麼事をした？」

と今にも嘴付きそうな顔をした。

「多分神さまが為したんでしようよ」

と乃公は梟のように馬鹿面をして答えた。そして今にも雷が落ちそうだったから、一目散におつ走つて来た。

次に行ったのは雜貨店である。此処にも若旦那がいる。頭の毛の赤い、頬に赤痣のある人だ。彼でもクラブ白粉の広告に出る積りで運動をしているって、富子さんが言つて

いた。

「御機嫌好う」

「やあ、太郎さん、御機嫌好う。能く来たね。君は干葡萄が好きだったね、さあお食り」

と乃公に干葡萄を一掴み呉れて、親の仇にでも会ったように喜んでゐる。美しい姉さんが三人もあると、何処へ行つても評判が好い。乃公は帳場に坐つて葡萄を喰べた。そして最早好い頃だと思つて、写真を出して、藪隈みのようにして一心に眺めながら、

「何うも此写真はあなたに似ていますよ」

と顔を見比べてやつた。

「どうれ」

と赤旦那は森川さんの書生のような返辭をして手を出した。「手を出す心は乞食の心」と乃公が言うと、奴さん本氣にして手を引込めたから、乃公は又「引込む心は河童の心」と大きな声を出した。店の者は皆笑つていた。

「冗談は止して早く見せ給え」

と止せばいいのに痣旦那は頻りに見たがるから、余り焦らして虫でも出ると悪いと思つて、乃公は写真を渡してやつた。是も姉さん達の惡戯で、痣が沢山拵えてある。頭の毛は赤いインキで塗つてある。裏面には「是でも申込んだのよ」と書いてある。赤旦那が青旦那に変色した頃は、乃公は干葡萄をもう一掴み貰つて、外へ出て躍つていた。

片岡さんは弁護士である。事務所は新町にある。此人は度々家へ来るから乃公は能く知つてゐる。恐ろしく声の太い人だ。事務所に入つた時には何だか、胸がドキドキした。大方氣怩がしたのである。しかし道順だから是非

寄らねばならぬ。

「今日は、今日は什麼見世物がゐいますか」

「何じや。やあ、太郎さんか」

とバリストルは新聞を置いて、乃公を見下した。荒刻の仁王を微笑させるのも偏見にお春姉さんの威光である。

「あ、お春姉さんが斯う仰有いましたよ。彼の何ですつて、今日片岡さんの事務所へ行くと、怎麼怪物が見られますつて」

乃公は「珍世界」の写真を三脚机の上に置いたが、もう少しで搏される所だった。珍世界だけあつて事が荒い。片岡さんは訴えるとか何とか言つて憤つていた。

未だ方々へ行つたのだけれど、其を一々書くとき夜半までかかる。又鮎のように吠が出始めたから、是でお仕舞にしよう。夕飯までに写真を皆配つて歸つて来た。御飯の時に姉さん達は次の週に舞踏会をしたいつて、三人がかりでお母さんを強請つていた。しかし招待状を出しても男は一人も来ないだらう。来なかつたつて構わない。乃公が一人で御馳走を喰べてやる。

お母さんの御許可が出て、土曜日に舞踏会するので、姉さん達は蜜蜂のように忙しい。乃公も大層音なし。疲れる位お手伝をしてやつても、邪魔になつて仕様がないうだから、乃公は椅子に坐つて見物していると、頻りに呼鈴が鳴つた。無暗に鳴らす。一体誰が来たのだらうと思つて飛んで行くと、田舎の伯母さんが来たのだ。伯母さんは年に二度ずつ来て、一週間位泊つて帰る。花さんは顔を皺

めて、

「仕様のない伯母さんねえ、何時でも困る時に来るのなの」

「又一週間は御逗留でしょう。すれば屹度舞踏会にも出なさるわ。彼の昔の着物を着て」

「困るわねえ」

と三人がかりで困っている。

伯母さんは金持だけれど、昔し者だそうだった。彼の顔は唯今動物と共にノアの箱船から出たばかりで、うまいという顔だそうだった。日曜学校で教わった時に、動物は皆二足ずつ出て来たと言ったが、伯母さんは老嬢だから一人で出て来たに相違ない。何しろ姉さん達が頻りに困っているものだから、乃公も困った人が来たと思って、大に困っていた。

お茶が済んで伯母さんは一人で二階にいた。乃公は御機嫌うかがいに行つて、少時談話の末、用談に取かかった。

「伯母さん、伯母さんは姉さん達が可愛う思いますか、憎う思いますか」

「何を言うのだねえ、お前は。姉さん達やお前が可愛いばかりに遠々しい処を僇うして来たのじゃないか」

「真正ですか？」

「お前は余つ程可笑な事を訊く子だね」

「其じや真正に可愛いなら、伯母さんは是から直ぐに帰つて下さい。姉さん達は舞踏会があるので、伯母さんがいちゃ困るんですって、お友達に外聞が悪いのですって」

と尚お乃公は得心の行くように詳しく話してやつた。

乃公は伯母さんが那麼に憤るだらうとは思わなかった。

伯母さんは火のようになって、直様袍を抱えて、階下へ下

りた。そして車屋を呼んで来て下さいと言つた。お父さんもお母さんも吃驚して、頻りにお止め申した。姉さん達も泣声になつて止めた。しかし伯母さんは返事もしない。一國だから言出したら決して後へは退かぬ。お歌さんは手を払い除けられた。

「もうお前の家の敷居は什麼事があつても跨ぎません。知らずの家へは、もうもうもう二度と再び来ませんから」

と伯母さんは蝙蝠傘で土を叩きながら、牛のような事をいつて、袍を抱えたなりで、さっさと行つて了つた。

「どうしたのだろう」

とお父さんが言つた。

「どうしたのでしょうか」

とお母さんがお父さんの顔を見た。

「真正にどうなすつたんでしょうねえ」

と姉さん達も口を出した。そして皆な少時顔を見合せていた。「真正にどうなすつたんでしょうねえ」もないものだ。乃公はなかなか骨を折つた。

待ちに待つた舞踏会の晩が来た。お島は乃公に他所行の洋服を着せて、横撫ぜをしないようにと言つたから、一つ攜つてやつた。新しい襟飾を付けて、新しい手袋を穿めて、新しいハンケチを持つて、何も彼も新しづくめだ。姉さん達は会の心得を三十分も説教して、若しお行儀が悪いなら直ぐに床に入れて了うといつて脅かした。広間へ行つた時には、靴がギューギュー鳴つて弥喧しい位だった。燈火が沢山ついている。其処此処に綺麗な花が飾つてある。

ピアノを弾く人も来ていた。乃公はアイスクリーム、菓子、蜜柑、ジュリー、サイダ、サンドイッチ等の事を考えたら涎が出た。是は決して乃公が食辛抱だからじゃない。何人だって風邪をひけば喉が出る。悲しい事を考えれば涙が出る。甘い物の事を想えば涎が出る。当然の話だ。賤しいなんて言えは酷い目に会わしてやる。姉さん達は白い着物を着て、平常より何倍美しいか知れない。頭に花を挿している。乃公の耳を引張ったりしそうには見えない。

其中にお客様が見え始めた。知合の婦人連は大概集った。時計が九時を打った。しかし男の客は一向姿を見せない。森川さんが一人来たばかりだ。乃公は胸に覚えがあるから、少々足が慄えて来た。

ピアノ手は幾度もピアノを弾いた。婦人連は仕方なしに、婦人同志で組んで躍った。が、女ばかりじゃつまらないと見えて直きに罷めた。時計が九時半を報じた。乃公は益々慄えて来た。しかし黙っていると怪しまれるから、「きつと電車が停電したのでしょうよ。それから彼処で道普請をしていますから車が通らないのでしょうよ」

お客様はコソコソ話を始めた。姉さん達は額を鳩めて弱っている、突然に呼鈴が鳴った。愈々来たか、やれやれと皆が急に元気づくと、何の事だ馬鹿馬鹿しい。お島が澄まして名刺を持って入って来た。大方お断りの挨拶だろうと思っていると、さあ大変、猫がとうとう袋から飛出した。先日の写真が戻って来たのだ。

引続いて呼鈴が十二三度も鳴った。お島は其都度お得意になつて写真を持って来る。最後に男の人が二人来た。此人々の写真の裏には「まあ好い口付だこと」「洋服屋の看

板」と書いてあった。しかし先生方は楽書を極くお目出度文字通りに解釈して、のこのこやって来たのだ。

男三人は女五人を相手に、代る代るランサーズを躍った。雪子さんは始終クスクス笑っていた。お歌さんは泣きそうな顔をした。やがて一同食卓に着いたが、何だか奥歯に物が挟まっているような風であった。乃公は余り気の毒だったから、五杯目のアイスクリームは喉へ通らなかつた。

お客様が帰ってから、お春さんは最早世間へ顔出しが出来ぬ、恁麼悪戯をした者が知れたら唯は置かないと言った。すると森川さんが乃公の顔をジロジロ眺めて、「太郎さんが知っているだろう」

と言った。乃公が知っているものか。

「いいえ、僕知っているもんですか。ポチですよ。ポチが悪いのです。僕が此間ポチに写真を喰べさせたら、ポチが啣えて表へ持つて行つたんです。きつと何処へ落して来たんです。真正に困る奴だ」

「それじゃお前が写真を出したんだね」

とお春姉さんが恐ろしい権幕をした。再び言う、猫は袋から飛出した。乃公は命がけで床の中へ潜り込んだ。

乃公は今度遠くの学校へやられるのだ。三月の休暇までは帰って来れないんだ。けれども家にいて姉さん達に苛められるよりか余程得だと思ふ。学校には乃公位の子供も大勢いるそうだ。広告には「土地高燥にして空気新鮮遠く都会の雑沓を離れ、児童の勉学並に健康に適す。汽車並に電車の便あり」と温泉場の案内見たような事が書いてあつ

た。尚お幼年生の為めには特別の設備ありとしてあるから、満更の学校でもなからうとお父さんが言った。

家を出る時は悪いものだ。お母さんや姉さん達が玄関まで送ってくれた。

「能く先生の仰有る事を聴いて、風邪をひかないようにね」

とお母さんに外れた鈕をはめて貰った時には、乃公は喉へ団子が悶えたような心持がして、黙ってお辞儀をした。車が余程行つてから振返つて見たら、皆は未だ立っていた。お島はハンカチを振っていた。

お父さんは学校まで送つて来て、校長さんに種々と頼んだ。腕白者で困るなんて言つた。しかし校長さんは子供は活潑に限る、少し腕白な位が好いのですと言つていた。なかなか話せる奴だ。

今夜は始めて寄宿舎で寝るのだ。持つて来た菓子皆で喰べた。皆乃公よりも大きい。菓子を喰べるのが早いのは驚いちゃった。

家では今頃は姉さん達が彼の室で談話をしているのだらう。お母さんは最早お休みかしら。お島は世話が焼けないつて喜んでゐるだらう。屹度手紙を下さいと言つたが、明日にしよう。

乃公は丈が低いものだから、食事の時には椅子の上にウエプスターを置いて、其上に腰を掛ける。乃公は奥さんの

直ぐ隣席に坐る。今朝奥さんが一寸立つた時に、乃公は手早く椅子を退けてやつた。すると奥さんは椅子があると思つて腰を下して、匙を持ったまま尻餅を搦いた。幸い人間だったから宜かつたが、若し瀬戸物だったら壊れて了つたろう。

乃公は地理を習い始めた。先生が地球が円いというけれど、乃公には何うも然う思えない。教場に地球がある。是は全く円い。しかし彼は全か空虚か分らないから、近日に穴を明けて見よう。乃公は空虚として置く。

尚お算術を教わる。是は奥さんが先生だ。可笑な事が書いてある本だ。太郎が五つ扇を持つてゐる、二郎は十持つてゐる、三郎は十五持つてゐる。三人のを合せると三十になるのは異存ないけれど、十五は嘘に極つてゐる。風屋じゃあるまいし、十の十五のつて持つてゐる子があるものか。

校長と奥さんの外に先生がもう一人ゐる。お花姉さんよりも少し年が寄つていて、名を大内さんという。乃公は此先生が好きだけれども、善ちゃんも彼は老嬢だと言つた。老嬢だつて構わない。乃公は自分が家に居た頃の話をして聞かせたら、大層同情してくれた。そして寂しい時には何時でも遊びに入らつしやいと言つた。其中に遊びに行こう。

家郷病は悲しいものだ。昨夜は種々の事を思出して半時